エッセイ
――AI時代のフェリス女学院大学における教育――

荒　井　　真

中学生の時に手塚治虫の『火の鳥２　未来編』を読んだ。その時の衝撃をいまでも覚えている。人類がすべての判断を人工知能（AI）に仰いでいる35世紀の遥か未来の話である。地上は荒れ果て、人類は地下に潜り、世界の５カ所に大都市を造り集まって暮らしている。ところが、ふとしたことからヤマトとレングードという都市を統治しているAIが喧嘩をはじめ、ついにはその他の都市も巻き込んだ全面核戦争となり、一人を除いてすべての人類が滅亡してしまう。そしてそこから物語は佳境に入っていくのである。

この本を読んだときにまず感じた素朴な疑問は、AIが核戦争を決定したとき、なぜ人間はAIに反対できなかったのだろうというものであった。しかし、「偉大な母、地球の救い主、人類の総指揮者ハレルヤ」と呼ばれるAIにずっとすべてを委ねてきた人間にとって、そのAIに反対するのは神に反抗するようなものだったのであろう。AIハレルヤは、合成パンではなく、白いご飯が食べたいと言った市長を罷免し、ある人類戦士に対して、計算では幸せになれないから恋人と別れるようにと命令する存在なのである。

そのころは、まだAIなど夢物語であったし、人間がAIに管理された遺伝子操作により生み出されているなどという設定も35世紀ならばあり得るかなと思った程度であった。

しかし、最近のAIの発達は目覚ましく、2045年には人間の能力を超えるというし（「シンギュラリティとは―AIが人知を超える転換点」（日本経済新聞、2019年１月１日）、遺伝子操作にしてもDNAを操作した女児が中国で誕生したというニュースを耳にしたばかりである（「中国で『ゲノム編集女児』誕生か　大学側は『倫理違反』」（日本経済新聞2018年11月26日）。『火の鳥２　未来編』の初出は1967年であるから、手塚治虫の慧眼には驚かされる。

さて、このようなAI時代を迎える今日において、フェリス女学院大学の教育はどのようなものであるべきであろうか。首尾一貫した理論があるわけではないので、思いつくままに雑感として綴ることをお許しいただきたい。

ご存知の通り、現代社会は合理性至上主義であり、業績至上主義である。無駄は忌避され、役に立つことが常に求められる。そしてAIは合理性の権化である。合理性や業績を求めること自体は間違ったことではない。それは大切なことでもある。しかし、合理性や業績のみにもとづいて人間を評価することは人間の尊厳に反するのではなかろうか。

それに、AIが人間の能力を超えたとすれば、合理性や業績という点のみから見ると人間は無価値とまではいかないが、かなり劣った存在となってしまう。現在の仕事の多くがAIにより置き換え可能だ

といわれている。業績至上主義を信奉するならわたしたちの存在理由を見つけることはますます困難になるであろう。わたしたちはこのような状況に断固として抵抗していかねばならない。

しかし、AIに対するラッダイト運動（機械打ち壊し運動）を行っても意味がないことは歴史が示している。機械を打ち壊したところで、機械化の波を食い止めることはできなかったのである。したがって、AIと共存しつつ生きていくことになるだろう。できれば、共栄できればいい。それでもなお、わたしたちは、合理性・業績の軛につながれることなく、人間本来の価値を保たなくてはならない。そうでなければ、AIはわたしたちを支配する偶像神になってしまう。AIに真似できない能力をこれからは身に付けるべきだという言説をよく耳にする。それはそれで大切なことだと思うが、わたしたちは全員がクリエーターになれるわけではないし、なる必要もないであろう。

大事なことは、『ホモ・デウス』の著者であるユヴァル・ノア・ハラリがいうような社会、すなわち、AIと一体になった一握りの「超人」とその他すべての「無用者階級」に二分される社会が到来しないようにすることである。（ユヴァル・ノア・ハラリ『ホモ・デウス（下）』（河出書房新社））そして、そのためには業績に関係なく各人が尊重されるという理念が不可欠なのである。

もちろん、AIのインフラ化によって人間の利益となることもある。AIとロボットが結合して稼働することによって、人間が労働から解放されるかもしれないのである。労働はそもそも労苦・苦役（labor）であり、古代においてはできれば避けたいものとして捉えられていた。旧約聖書の創世記を見ても、エデンの園を追い出されたアダムは額に汗して働かなくてはならなくなった。そこから解放されることは歓迎すべきことではなかろうか。

その際に気を付けなければならないことは、すべての人々にその恩恵が行き渡ることである。生産活動はAIや機械やロボット（元々ロボットとは、「強制労働」という意味である）が最も効率的に行ってくれるのであるから、生産に関わる人間は必然的に減少する。しかし、生産に関わらなくなった人々が生活できなくなったら元も子もない。すべての人々には生活するには十分であるが、勤労意欲を失わない程度のベーシックインカム（最低限所得保障）が平等に与えられなければならないのである。それは、人間存在の尊厳を守るためである。それでは人間は何をするのか。それを考えるには古代ギリシアが参考になると思われる。

古代ギリシアでは基本的な生産活動を奴隷が行っていたため（当然ながら、自由人が働かなかったわけではなく、奴隷がすべての生産活動を行っていたわけではない）、自由人である市民はアゴラ（広場）において真・善・美について議論を闘わせていた。つまり、言論活動を行っていたのである。遊んでいたといってもいいかもしれない。

もちろん、このような遊びから古代ギリシア文化・文明が生まれてきたことはいうまでもない。英語のSchoolの語源はギリシア語の「余暇」を意味するスコレーである。暇があってはじめて自由な思索ができ、学問が発達するのである。

古代ギリシアの奴隷の役割を果たすのがAIでありロボット・機械であろう。そうであれば、わたしたちには今後、自由時間を生かす方法を学んでいかねばならない。さらにいえば、遊ぶ能力や楽しむ能力が大事になってくるのではなかろうか。

それでは、これまでの労働観はどうなるのであろうか。勤勉を是とする労働観は労働を召命と捉え、

天職（Beruf, vocation, calling）という概念を造り上げた宗教改革者たち、とりわけカルヴァン派の人々に由来する。そして、この考え方はその後全世界に広まり、資本主義の成立に寄与したといわれている。日々の労働に宗教的価値を与えたこの考えは、当時の市井の人に天国への希望と勇気を与えたと思う。しかしながら、そこから徐々に宗教的な意味合いは抜け落ちてしまい、現在では働けない人々の存在理由を危うくする根拠となってはいないだろうか。

もちろん、勤勉が悪いわけではない。だが、宗教性を欠いた勤勉が業績による選別を過酷にしている可能性は十分にある。過労死問題や学校のいじめ問題（学校を休みたくても休めない！）も勤勉が美徳とされるなかで深刻化しているのではないか。この問題を考えるとどうしてもミヒャエル・エンデの『モモ』（ミヒャエル・エンデ『モモ―時間どろぼうとぬすまれた時間を人間にかえしてくれた女の子のふしぎな物語』（岩波書店））に出てくる「灰色の男たち」を思い出してしまう。効率を人に強いて他人の時間を奪い、それを葉巻にして吸っている者たちである。わたしたちは「灰色の男たち」に時間や人間性を奪われてはならないのである。

しかし、「仕事が生きがい」という人もいる。そういう人々にとって仕事は単なる生計を立てるための手段ではなく、自らのアイデンティティーの拠り所なのである。突然、給与は保証するから仕事しなくてもいいといわれると、自らの存在意義が奪われたと感じる人も多いと思う。失業が人々に深刻なダメージを与えるのは、それが単なる金銭問題ではなく、むしろ自らが必要とされていないという無用感・疎外感を生むからである。

そのような人たちはどうすればよいのか。文科省は大学で新しい専門技術を修得して再就職することを勧めているようである（文部科学省専門教育課「リカレント教育の拡充に向けて」2018年７月31日）。しかし、20～30歳代ならともかく、40歳以上の人たちが新しい専門技術・技能を学び直して企業は受け入れてくれるのであろうか。わたしはかなり疑問に思っている。それこそAIやロボットの方がコストパフォーマンスとしては良いであろう。

それよりも、大学において専門技術ではなく、リベラル・アーツを学んで視野を広め、新しい生き方を考える方が楽しいし、有益だと考える。大学において人生や人間について考えるのである。そのような人々が大勢、大学の門を叩くことになれば、学生は若者であるという常識も変化していく。そして、このような変化はリベラル・アーツ教育には望ましいことである。なぜなら、多種多様な人々が集い、様々な価値観が混じり合うなかでこそ、人間についての思索は深まるからである。

「人間性」とは何であろうか。わたしにはそれを完全に定義することなどできない。ただし、ホイジンガ（ヨハン・ホイジンガ『ホモ・ルーデンス―人類文化と遊戯』（中央公論社））やカイヨワ（ロジェ・カイヨワ『遊びと人間』（講談社学術文庫））の意見に聞き従えば、人間の本質は「遊ぶ」ことにあるとのことである。そうであれば、少なくとも遊ぶ能力をもっていることは人間性の一要素であると考えられる。遊ぶというと不謹慎に思われるかもしれないが、きわめて主体的で創造的な行為である。「生産」も人の技であるが、「遊戯」の方が人に固有である。AIは遊ぶのであろうか。遊ばないと思う。ただ、遊ぶことができるようになったAIはもはや機械ではなく、シリコンとデータからなる一知的生命体として捉えるべきではなかろうか。

遊びは自由で自己目的的である。そして、何かを生産するわけでもない。でも楽しいのである。楽し

いといっても真剣でないわけではない。ものすごく真剣である。甲子園大会に出場する高校球児たちは誰よりも真剣であろう。

ところで、強いられた「遊び」はもはや「労働」であり、遊びとはいえない。何かの手段となってしまった「遊び」も「労働」となるのではなかろうか。競馬の当たり馬券で生計を立てている人がもしいるとすれば、それは遊びではなく、労働であろう。そして、もし、箱根駅伝の優勝校に文科省から10億円の補助金が下りることになったら、ランナーたちは勝利が穢されたと思うのではなかろうか。

遊びはこのように自由で、自己目的的で、役に立たない。でも、このような一見無駄な行為を楽しめることこそが人間性の根本にある気がするのである。

それでは、人間性の根本にある遊ぶ能力を育むにはどうすればよいのであろうか。リベラル・アーツ教育こそがその解答だと考える。なぜなら、リベラル・アーツliberal arts, artes liberalesは、自由学芸とも称され、元々は古代ギリシア・ローマ時代に奴隷ではない自由人が学ぶべきものとされた諸学問のことであったからである。奴隷とは違って自らの道を自由に選べる自由人が、これからの人生をどのように生きていくかを決定する際に必要な基本的な「技」を伝授するのがリベラル・アーツであった。誤解を怖れずに言うと、どのように遊ぶか、いかにして自由時間を豊かに使うかを指南する技芸であったのではないか。

古代ギリシア・ローマや中世・近世ヨーロッパにおけるリベラル・アーツ科目は、自由７科と呼ばれるように、７科目からなっていた。言語を扱う「文法学」「修辞学」「論理学」の３科triviumと数的思考を扱う「算術」「幾何学」「天文学」「音楽」の４科quadriviumである。なぜ、天文学と音楽が数学に関わるかというと、天文学は天体の運動と暦、音楽は音階の比例関係を考察したからである。そして、これらの科目を修得した者には、自由に人生を選択する可能性が与えられた。

ところで、現代のリベラル・アーツ科目は自由７科である必要はまったくない。わたしとしては、論理的能力（真理を認識する能力）、倫理的能力（正義を考察する能力）、感性的能力（美を感じ取る能力）を賦活する学芸であれば何でも構わないと思う。そしてそれらの能力は、各人がそれぞれの人生を豊かに生きるために必要不可欠のスキルであると考える。

また、リベラル・アーツは学ぶプロセスを大事にする。どちらかというと、何を学ぶかよりも、どのように学ぶかが重要なのである。

知識を貯め込むためだけでは意味をなさない。確かに、知識のストックがなければ、何らかのアウトプットをなすことはできない。しかし、貯め込むだけならコンピュータの方が断然優れている。各所から様々な素材を集めてきて、一つの作品や論を構築し、人を感動させたり、納得させたり、面白がらせるためには、自分自身のことも含めて、人間についてよく知らねばならない。そして、人間について知るためには、対話が必要である。自分自身との対話は内省という形になるだろうし、他人との対話は議論になるだろう。自分と他者との相互コミュニケーションが必須なのである。また、問題を提起し、それを解決する方法を提案する際には、事実を客観的に把握すると同時に物事を多角的に見ていかなくてはならない。そのためには、多くの立場や価値観が異なる人々と意見を交わしていかねばならないのである。

このように、現代の大学におけるリベラル・アーツ教育の目的は、自分がいかなる存在であるかを知

り、どのような人生を送りたいかを思索し、他者や社会と共働・共感できる能力を磨く手助けをすることだと考える。そしてそれこそが、AI時代において人間性を維持し、人間の尊厳を守ることになるのではなかろうか。

さてそれでは、フェリス女学院大学のリベラル・アーツ科目を通して、具体的にどのようなスキルが活性化されるのであろうか。すべてについて考察することはできないので、恣意的な選択となってしまうが、文学、語学、音楽、社会科学諸科目、キリスト教について見ていく。その際、AIとの関係も合わせて考えていきたい。

まずは文学である。文学を学ぶことを通しては、読む喜び、感動や省察が与えられる。そして文学に親しむことは過去・現在・未来、洋の東西を超えて別の人生を体験することでもある。卓上における旅といってもいいかもしれない。そして様々な人生を体験することを通して、多角的な視点と他者を受け入れる寛容さを身に付けることができるのではなかろうか。

また、文学作品は千差万別であり玉石混淆かもしれないが、読んでいくうちに、何が自分を喜ばせてくれるのか、何に自分が感動するのかが分かってくる。これは映画や音楽でも同様であろう。自分は感動するのになぜ友人は感動しないのか。面白いと思う点が違うという経験もするであろう。そのなかで自分自身のアイデンティティーを発見することができるのではないか。これは、自分がかけがえのない存在であることを確認すること、そして、他者をあるがままで受け入れることにつながると思う。

読む文学作品はマンガであろうが、ライトノベルであろうが、どのようなものでも構わないと思う。（ただし、ライトノベルには日本語や文章に問題があるのも多いので注意が必要ではある。）しかし、やはり外すことができないのは古典である。古典は時代を生き抜いてきた書物である。以前、何かの本で、「どうして古いバイオリンには素晴らしいものが多いのか」という問いに対して、「古いバイオリン自体が素晴らしいのではなく、凡庸な楽器は雑な扱われ方をされているうちに壊れてしまうのに対して、傑作は大事に扱われる。よって、現在まで残っている古い楽器には良いものが多いのだ」と答えているのを読んだことがある。とても腑に落ちる説明であった。そのような選別を経たのが古典である。読んで損はない。ただし、古典を味わうにはその時代背景と専門的知識が必要になることがある。その手助けをするのが大学教員の役割のひとつではなかろうか。

さて、読む喜びと感動を知った人は、表現する欲求をもつのではないか。多くの学生がTwitterやInstagramを用いているのは、現代でも表現することに喜びを見出す人々がたくさんいることを示している。先程、「全員がクリエーターになれるわけではないし、なる必要もない」と書いたが、なりたい者がいれば、なってはいけない理由はない。

AIに物語が書けるかどうかは分からない。古今東西の有名な物語をインターネットから引っ張ってきて、そのエッセンスをつなぎ合わせてストーリーを組み立てることはできるかもしれない。しかし、AIがその作業自体に感動するということはないと思う。なぜなら、AIには身体性が欠けており、自らの人生を生きることがないからである。AI時代において大切なのは、それぞれが自分の物語を喜び、怒り、悲しみをもって紡げるようになることではないだろうか。自分の感情や意思を相手に真に伝えた

いと思うならば、そして心から人を感動させたいと願うならば、その対象をよく知らなければならない。自己満足では他人を感動させられない。このような表現活動がいたる所で起これば、人間の共感能力は高まるのである。

人々が各自の物語を創り出していけば、世界は豊かになる。その膨大な物語は国家や社会や企業が当たり前のものとして押しつけてくるフィクション（国家なども同様にフィクションであるが）を相対化する力をもつであろう。フィクションの力でフィクションに対抗するのである。言い換えると、AIが支配する制度にとってのノイズをばらまくのである。

そして、表現者が存在するためには読者がいなくてはならない。読むことに集中し、表現しないことに引け目を感じる人もいるが、そのように思う必要はない。なぜなら、読者は受け身の表現者だからである。

次に語学である。語学を通しては、どのような能力が身に付くであろうか。語学はコミュニケーションの手段である。そしてコミュニケーションは他者と共生するうえで必要不可欠な技能である。コミュニケーションにおける言語の重要性は論をまたない。外国の人々と分かり合うためには相手の言語を知ることが必須である。また、言語習得の際には、その国の歴史や風習などにも興味が湧くという副産物もある。

ただし、ここでもAIの影響が出てきている。AIによる自動翻訳の格段の進歩である。おそらくそう遠くない未来に日常会話や定型的な事務書類については、AIが処理することになるだろう。しかし、いくらAIが発達しても微妙なニュアンスや人情の機微などは訳せないのではないか。それは、先程述べたように、AIには身体性が欠けており、人生を知らないからである。やはり、文学作品などは原語で読むか、専門家による翻訳を読まなければ深く味わうことはできないように思う。

いずれにせよ、わたしたちがAIに頼ることができないのは母語である。なぜなら、外国人と話すときにはAI翻訳機を用いることもできようが、母語で話すときに機械を介するのは考えられないからである。したがって、AI時代になっても、母語に関しては、AIの援助を受ける可能性が少ないから、母語、つまり、私たちの場合には、日本語の徹底的な学習が必要になる。この力が弱ってしまうと他者との共働・共感能力が落ちてしまう。それは会話のなかだけではなく、文書や文学を読むうえでも起こることである。

それでは、音楽を通して獲得するスキルは何であろうか。やはり美を感じ取り、表現する能力であろう。美の形は多様である。しかし、その美しさを相手に伝えるためには、文学のところでも述べたように、伝える相手をよく知らなければならない。つまり、人間という存在について深く理解することが要求されるのである。

合奏や合唱などの場合には、一人ひとりが集まって一つの作品を演奏するわけであるから、自らの役割をわきまえ、全体の調和を考えることが必要である。その際に、育まれるのは、自分を外から俯瞰して見る能力、そして共働する能力である。また、それぞれの立場に立って考え、感じる能力、すなわち、共感する能力も活性化される。

これまでは顧みられていなかった「美」を発見することも大事である。これはAIにはできない作業である。これまでは「美」と考えられていなかったものに「美」としての意味を与えて、提示することは、過去や現在のデータを分析することで答えを出すAIには不可能なのだ。

ところで、AIには感性や感情はあるのであろうか。将来生まれるのであろうか。断言はできないが、合理性の権化であるAIには感性や感情は生まれないと思う。なぜなら、人間関係や国際情勢を見ても分かるように、感情はしばしば合理的な判断を狂わせるからである。AIにとって感情はノイズである。『火の鳥』に登場するAIは感情をもっていて喧嘩をしたが、極限まで合理的な判断をなすようにプログラムされたAIはそんな無駄な行為をしそうに思えないのであるがいかがであろうか。

最後通牒ゲームという行動経済学において有名な実験がある。ある人に100ドルを与えて、その者がその金を別の一人と分割するというゲームである。分割方法は50ドルと50ドルでもいいし、99ドルと１ドルでもいい。ただし、その分割案に両者が納得しないと、双方とも取り分はゼロになるという条件である。合理的に考えれば、１ドルだけでももらえた方が得であるのだから、99ドル対１ドルでも合意する方が利益になる。ところが、ほとんどの人は取り分がゼロになるのを厭わずに、そのような不公平を嫌って、安易な合意を拒否したそうである。また、半々に分けたり、60対40で分けたりする人が大半であったとのことである。AIなら躊躇なく１ドルで合意するであろう。１ドルに怒りという感情を覚えるのは人間である。合理的ではないかもしれないが、このような感情こそが人間を人間たらしめるのではないかと考える。

AIは音楽を聞いて楽しんだり、感動したりするのであろうか。音の周波数や強弱をデータとして分析することはできても、音楽に感動して処理速度が増加することはないだろう。人々が好む曲の種類やフレーズを認識することはできるが、AI自身の好みを語ることはないのではなかろうか。今後AIが古今東西の名曲を換骨奪胎して新しい曲を作る時代が来るかもしれない。（そんな社会は嫌であるが。）しかし、それに感動できるのは人間だけなのである。この感動できる能力を育むことは、人生を豊かにするのに不可欠であると考える。

社会科学諸科目はどうであろうか。社会科学は、経済、法律、政治などに関する客観的真実を探求し、社会を豊かにしていこうという学問である。本来ならば「社会科学諸科目」ではなく、個々の科目について考察するべきであろうが、一つひとつ論じていくと長くなってしまい、論旨がぼやけてしまいそうなので、雑駁なまとめ方をしてしまったことをお詫びしたい。

AIはこの分野に最も進出してくると考えられる。景気分析などはAIの独壇場であろうし、実際、株式市場ではすでにAIが活躍している。銀行などではローン審査をAIだけに任せるところもでてきたようである。法律分野でも判例分析や量刑判断などはお手の物であろう。

しかし、注意しなければならないのは、AIの回答には理由が付いていないことである。AIの思考回路はブラックボックスであって、なぜそのような答えにたどり着いたかは分からない。それを信じるか信じないかである。

やはり、ここでも人間の決定権を担保するためには、人間による検証が不可欠である。また、AIは目的達成のために合理的だと考えれば、人倫に反するような方法を提示してくるかもしれない。それを

チェックするのはやはり人間の役割である。それができなくなってしまったら、『火の鳥』に登場する政府のように、明らかに人間にとって最悪の決定でもAIの指示に唯々諾々と従う存在になり果ててしまう。

検証のためには、これまで通りの人間による分析を続けることが肝要である。人間の論理力・分析力による検証はAIに対する監視となり得る。これは社会科学に限ったことではない。AIの方が能力において優れている分野であっても人間はそこでの能力の育成を怠ってはならないのである。

計算機やコンピュータの計算能力が人間よりも高かったとしても、人間は計算の訓練を止めはしなかった。これは当然のことである。たとえ、AIの翻訳能力がきわめて高くなったとしても、語学の教育をなくしてはならない。それは、AIに対する検証を行うためであり、人間の能力を退化させないためである。

AIの判断の妥当性を検証するには別の方法もある。それは「常識」に照らし合わせることである。AIの判断が人間のコモンセンスに適合するかしないかはきわめて重要な判断ポイントである。しかし、常識は当てになるのであろうか。そもそも何が常識であるかは定義できないし、各人が考える常識もそれぞれに違っている。また、時代や地域によっても常識は変わってくる。古代ギリシア・ローマにおいて奴隷制度は常識であったし、ナチスドイツにおいては、ユダヤ人やロマの人々を迫害することが常識となってしまっていた。このように考えると、常識のみに依拠してAIの判断の妥当性を判定するのは危うい。

常識が当てにならないとすると、何らかの価値観に依拠せざるを得ない。そのような価値観を育んでくれるのが最後に述べるキリスト教科目ではないかと考える。

キリスト教科目には、キリスト教をまったく知らない学生にその基礎的知識を教える任務がある。ただそれに留まることはない。キリスト教の観点から世界をどう見るかを伝えなくてはならない。キリスト教という新しい視座を学生に提供し、学生の世界観を豊かにすることが大切である。それこそが、AI時代においても人間の尊厳を守ることにつながると思う。キリスト教の価値観としてわたしが個人的に大事にしたいと考えるのは、イエスの黄金律とガラテヤの信徒への手紙３章28節の聖句、そして、フェリスの教育理念である「For Others」である。

イエスの黄金律とは、新約聖書のマタイによる福音書７章12節と同福音書の22章36-40節に記されている聖書の言葉である。

「だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ律法と預言者である。」（マタイ７：12）（日本聖書協会　新共同訳聖書、以下同様。）

「先生、律法のなかで、どの掟が最も重要でしょうか。」イエスは言われた。「『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』律法全体と預言者は、この二つの掟にもとづいている。」（マタイ22：36-40）

これは隣人愛の教えである。ただし、この教えを語ったのはイエスのみではなく、ユダヤ教の指導者であるラビ・ヒレルも、「片足で立っている間にトーラーの教えを教えよ」と異邦人から請われたとき、

「トーラーの真髄は『自分の欲せざるところを人にするな』であり、残りはその註釈である」と答えている。(『バビロニア・タルムード』「シャバット」31a) また、孔子も弟子の子貢から「一言で、生涯守っていくべきことを表す言葉はありますか」と問われたときに、「其れ恕か。己の欲せざる所は人に施す勿れ(それは、思いやりであろうか。自分がして欲しくないことを、人にするべきではない)」と答えているのである。(『論語』「衛霊公」第十五-23)

さて次は、ガラテヤの信徒への手紙の聖句を取り上げる。そこには次のように記されている。

「そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです。」(ガラテヤ３：28)

これはキリストにおける平等をあらわしている。そして、単なる平等ではなく、多様性のなかの平等である。つまり、ナチスが行った強制的な均質化などではなく、それぞれの独自性を認めたうえでの平等である。この理念はAI時代においてますます重要になると思われる。

最後に「For Others」という理念を取り上げたい。「For Others」とは何を意味するのであろうか。「For Others」はフェリス女学院の歴史のなかで自然と語られるようになった理念ではあるが、その解釈に当たってはやはり「フィリピの信徒への手紙」２章１-11節を参照するのが妥当であると考えられる。

> そこで、あなたがたに幾らかでも、キリストによる励まし、愛の慰め、“霊”による交わり、それに慈しみや憐れみの心があるなら、同じ思いとなり、同じ愛を抱き、心を合わせ、思いを一つにして、わたしの喜びを満たして下さい。何事も利己心や虚栄心からするのではなく、へりくだって、互いに相手を自分よりも優れた者と考え、めいめい自分のことだけでなく、<u>他人のことにも</u>注意を払いなさい。互いにこのことを心がけなさい。それはキリスト・イエスにもみられるものです。キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、すべての舌が、「イエス・キリストは主である」と公に宣べて、父である神をたたえるのです。(下線部筆者)

ここを読むと、わたしたちが「他人のことにも注意を払いなさい」と命じられるのは、「それはキリスト・イエスにもみられる」からであり、そのイエスは「神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者に」なったことが前提となっていることが分かる。よって、神の自己犠牲の業がわたしたちの「For　Others」の源泉なのである。ゆえに、「上から目線で他人を助けてあげる」のではなく、「一人ひとりの救いのために十字架で死んでくださった神に倣って他人と接する」ことが求められているのではないだろうか。

上記の３つの聖句が教えてくれる価値観は、次の３つではないかと考える。

①人間一人ひとりが神により贖われたかけがえのない存在であること、すなわち、一人ひとりが神により与えられた尊厳をもった存在であり、ある目的の手段とされてはならないこと。

②一人ひとりが多様性のなかにあって平等に扱われねばならないこと。

③互いに尊敬・尊重し合い、相手のことを思って、相手の利益となるように行動すべきであること。

これらの価値観を学生が血肉としてくれれば、その後の人生は限りなく豊かになるとわたしは信じる。また、こんなことを言えば神はフィクションであると断言する『ホモ・デウス』の著者に笑われるかもしれないが、これは神の命令なのである。そしてこの価値観は、AIの行動・解答の妥当性をチェックする際の基準となり得るのであり、完全とはいえないまでもAIやそれを恣意的に利用する人々の専断・暴走を防ぐことができるのではなかろうか。そして、この諸基準は大学教育を評価するに当たっても、つねに振り返り、立ち戻らなくてはならないものだと考える。

AI時代においてわたしたちはAIと共存していかなくてはならない。そしてAIを上手に利用することができれば、わたしたちの生活を格段に豊かなものにすることができる。

AIによって自由時間が増えれば、人々は学びの時間を増やし、思索を深めることができる。その際に、リベラル・アーツこそがAI時代に生きる人々の糧となるのではないか。

ただし、それには前提がある。すなわち、AIやロボット、機械が生み出す富や成果は人類全体に平等に分配されなければならない。各人が生活するのに十分な資力がベーシックインカムのような形で与えられなければ、AIは単なる収奪の道具となってしまう。

AIには利点があると同様に用い方によっては人類に害をなす存在にもなり得る。よって、わたしたちはAIの下僕にならないよう注意しなければならない。そして、AIを利己的に用いて人類を支配しようとする一握りのエリート層の台頭を許してはならない。

それを防ぐためには、どうすればよいのか。そのためには、AIが人倫に反するような用い方がされないようにつねに人間がチェックする必要がある。その際には、上記の３つの価値観をわたしたちが共有する必要がある。そして、その価値観に依拠してAIの行動をチェックするのが望ましいと考える。

第一に、AIが人間の尊厳に反する用い方がされていないか。人間を道具として扱っていないか。第二に、AIが人間の多様性と平等を犯すような用い方がされていないか。第三に、AIがすべての人の利益となるように用いられているかをチェックしなければならない。

チェックをするには人間にその能力がなければならない。よって、AIの使用が普通になっても人間の数的思考や言語能力などの教育を止めてはいけないのである。そして、人間の感性を賦活し、他者と共感・共働する力を育て、合理性至上主義を克服する教育をしていかなければならないのである。

（あらい・まこと）
フェリス女学院大学国際交流学部教授